

コロナ禍 3年目を迎えた大学教育 ～レジリエンス（折れない心）の必要性～

教育研究紀要委員長

矢田貞行

コロナ禍の中、3年間の年月が流れた。この間、大学は言うに及ばず、小学校、中学校、高等学校においてもオンラインに基づく遠隔授業の導入、さらに従来の対面授業とを併用したハイブリット型授業、またその他最新のICT機器を活用したSociety 5.0を先取りするような通信科学技術を用いた教育方法など、GIGA SCHOOL構想に見られる最先端のテクノロジーに基づく教育の急速な進展は、目を見張るほどである。

他方、コロナ禍にもめげずこうしたポジティブな教育改革への指向とならんで、いくつかのネガティブな深刻な問題も学生や児童生徒たちの間で沸き起こっている。これらの深刻な問題については、本稿においても木村論文（「コロナ禍における『体育史』授業報告－3年間の授業記録と遠隔授業の振り返りを中心に－）の中で取り上げられているので、ここではその詳細は彼女の論考に譲るとして、このような困難な時代にあっても、それに立ち向かい、乗り越えようとする“レジリエンス”といったメンタリティの耐性を、人間は潜在的に持ち合わせている。レジリエンスとは、「折れない、しなやかな心」であり、仮に折れることがあっても、しなやかに回復できる心を意味する。つまり、具体的には困難な状況に対する「自発的治癒力」「精神的回復力」「耐久力」などが、それである。

ところで、これまでわが国の子どもたちや青少年は、外国と比べて「自己を肯定的に捉えていない」「失敗を怖がり、自信がない」といった傾向にあることが内閣府や教育再生実行会議等の資料において指摘されている。こうした「自己肯定感」を欠く子どもたちに対しては、日々の生活の中で彼らを取り巻く親や教師たちが親身な関わりを持ち、見守る、分かりやすく導いてくれる、丁寧に面倒を見てくれるといった「関わり」が求められていると指摘されている。京都府総合教育センターの調査（『折れない、しなやかな心』を育てるために～レジリエンスを育む教職員の関わり～）『京都府総合教育センター紀要』第11集、2021年、p.1～17）によれば、こうした大人の働きかけを通してこそ、自分への信頼や他者への信頼が生まれ、レジリエンスの獲得につながるとされている。

こうしてみると、大学・学校において最も身近にいる教職員の役割が彼らのレジリエンスの獲得に大きく寄与していることは、疑いの余地がない。「親身に話を聞いてもらった」「丁寧に関わってくれた」ことが、大学生が思う「よかった・印象に残っている教職員との関わり」であるとされている。

結局の所、コロナ禍という非常事態にあっても、確かに一面においては最先端のテクノロジーを利用した ICT 機器に基づく授業方法の開発も必要であるが、いかにこれから Society 5.0 の時代を迎えると雖も、人間による人間同士の心のふれ合いが困難に打ち克つレジリエンスを生み出し、折れない心をもって生き抜いていく人間を育成している分野ではないかと思われる次第である。

まだまだ終結の見通しが描けないコロナ禍の状況であるが、悩み苦しむ青少年や子どもたちに対して、これからはこうした困難に対峙し、打ち克つためにも我々教職員が彼らに寄り添い、親身になって自信を持たせ、レジリエンスの心を涵養していくことこそ、大切ではないかと日々思うこの頃である。

参考文献：京都府総合教育センター編『『折れない、しなやかな心』を育てるために～レジリエンスを育む教職員の関わり～』『京都府総合教育センター紀要』第11集、2021年。